

## 映画を英語の教室で用いるならこんな風に —— 内容理解と語学学習の両立のために

関 戸 冬 彦

### はじめに

映画を英語学習の教材として用いた先行研究、実践例はこれまでも数多くある。また、映画を題材にした大学生向け英語教科書も多数存在する。こうした先例や歴史を鑑みるに、映画は英語学習の教材のひとつとして一定の割合ですでに浸透してきていることがうかがえよう。本稿ではそうした先行研究、実践例が行ってきた映画を教材として用いた際の英語学習をごく簡単に振り返りながら、それらとはまた違った視点、例えば音声理解よりも内容理解を中心にしながら発展させたもの、を執筆者オリジナルの実践例として紹介する。そして最後に、映画と英語教育のさらなる可能性についても実践例を挙げつつ検討してみたい。

### 1 映画と英語教育に関する先行研究とこれまでの大学英語教科書

英語学習における映画を用いた先行研究の中で代表的なものとしてまず挙げておきたいのが角山照彦の研究である。角山は日本における映画を用いた実践例を細かく追い、『映画を教材とした英語教育に関する研究』を記している。この本はタイトルが示す通り、日本における英語授業における映画を用いた実践例の歴史と記録であると共に、それを支えた日本のオーディオ機器の普及と発展の歴史でもある。角山によるとこうした普及が教室での映画使用に強く影響し始めたのは1990年代になってからだという。角山がこの本を出したのは2008年だが、2017年現在ではDVDやブルーレイが主流であり、後述するようにそれは字幕や音声の切り替えという面においては言語学習にとってビデオ以上に恵まれた環境をもたらした。つまり、音声と文字とを同時に理解する媒体としての映画を使うにあたっては、現代は幸いにも芳醇の時を迎えていることになる。角山以外にも、すでに20号以上刊行されている映画英語教育学会の年次紀要には毎年様々な角度からの研究、実践が報告されている。

一方、大学英語教科書も映画を教材として扱う可能性を早くから探ってきた。例えば松柏社は『グッド・ウィル・ハンティング』や『プラダを着た悪魔』を題材に教科書を作成している。ほかにも朝日出版社は『武器よさらば』、南雲堂、英光社は『ローマの休日』を用いた教科書を出している。こうした教科書の特徴としては、映画のセリフ、つまり英文スクリプトが教科書に本文として印刷され、その一部に空欄を設け、音声としての理解、すなわちリスニングを行わせる活動が必ずと言っていいほど含まれている。いやむしろ、リスニングのない映画を扱った教科書はないのではなかろうか。その上で内容理解に関する設問がリーディング的に配置されているのがスタンダードな教科書の誌面構成だろう。そうしたことから察するに、これまでの映画と英語学習との関係は、あくまでリスニングがその中心であ

り、その上で発展的な活動が若干加えられてきたということがわかる。なお、近年では朝日出版社の『ムービー・イングリッシュ』というVOAのTV放送の映画紹介コーナーを利用した総合教材や英宝社の『名作映画でTOEIC®』というTOEIC形式を用いたものなど、教科書の内容や構成も時代と共に多様化してきているようである。

## 2 オリジナル実践例

先のセクションで検討したように、映画を教材にした場合の英語学習の中心は大学英語教科書に倣うとまず音声理解、そしてその先に内容理解、がスタンダードな手順と言えるだろう。ここではそうした手順とは別に、執筆者がこれまでに実際の授業にて行ってきた実践を取り上げ、指導ポイントなどを示しながら3つの導入例を紹介していきたい。具体的作品としては、*The Graduate*、*Romeo & Juliet*、*Freaky Friday*と『ルパン三世 カリオストロの城』を用いた実践例である。作品によって主軸とするポイントがそれぞれ異なるので、音声理解が中心のものもあれば内容理解が中心のものもある。とはいえオリジナルと称する以上は先のスタンダードな手順とは差別化を計っているわけで、どちらかということ内容理解を重視したものが多い。なお、以下の実践例は通常の大学英語教科書のように学期を通して授業を展開していくことを想定しているというよりは、主要な場面だけに焦点をあてて単発的に用いることで大学1コマないし2コマで完結出来る補助教材的に、あるいはテーマに沿った学習の具体例としての位置づけという感覚で、扱っているものも含まれる。

### 2-1 内容理解とライティング — *The Graduate* を用いて

*The Graduate*は1960年代のアメリカで製作された映画で、主演はダスティ・ホフマン、音楽はサイモン&ガーファンクルが担当している。映画の細かい内容説明はここでは省くが、内容理解のポイントとしてはストーリーのラストシーンで、ダスティ・ホフマンが演じる主人公、ベンジャミンが教会で執り行われている彼の恋人、エレインの結婚式に急行し、周囲の制止を振り切り二人で教会から走り去るシーンをどう考えるか、が中心となる。また当時の時代背景やサイモン&ガーファンクルの歌も合わせて説明し、関連する教材として扱う。

授業では映画全体のストーリーは適切な素材を用いて見る前に説明をしておく。映画全部を見るとそれだけで約90分かかり1コマ丸々使ってしまうので、教室では他の英語学習や活動に伴うディスカッションなどの時間を設けるためにも事前説明の後、ベンジャミンがエレインの母であるミセスロビンソンと言い争いエレインにその関係をばらしてしまうところ、以降の後半の30分強だけを映像として見てもらうこととする。

事前の説明でベンジャミンとエレイン、ミセスロビンソンの複雑な三角関係を受講者はすでに理解しているので、教会でのラストシーンに関してはその場面でベンジャミンとエレインの行動に対して様々な反応が起きる。教室によっては爆笑や拍手喝采さえ起きる。こうした反応こそが内容理解と英語学習との接点である。つまり、この教会から二人で逃走するシーンを見てどう思ったのか、を英語で表現してみようというライティング活動へとつなげるのである。そのために、*Dear Benjamin*というタイトルでベンジャミンへの手紙的体裁をとったコメントを各自英語で書いてみようという指示を出す。分量は

受講者のレベルにもよるが、大学1、2年生であれば100～150語に設定することが多い。また、ライティングは受講者によって書きあげるスピードが異なり、かつ制限時間内で書くということに主眼をおいているわけではないので、授業内活動というよりは宿題として次の授業までに完成、とするほうが望ましい場合が多い。そして、次の授業では各々のコメントを発表したり、読んだり各自が書いた内容を紹介しあい、議論してもらおう。もちろん、こうした創作的な活動に絶対的な正解はないのだが、ひとつの意見の例として同じタイトル、Dear Benjaminという英語で書かれた記事を読んでもらい、各自のものと比較してもらおうという活動も加えている。こうすることで、映画を見ての内容理解からスタートし、英語を書く、そして読むが自然と活動として順々に行われていく。

なお、この活動では映画自体の音声については特に学習対象として取り上げたり、言及したりはしない<sup>1)</sup>。その代わりに、挿入歌としてたびたび登場するサイモン&ガーファングルの歌をリスニングとして用いる。実際、Mrs. Robinson, The Sound of Silence, Scarborough Fairなどが映画内で使われているので、受講者の耳にも鮮明に残っていることが多い。とはいえ、世代的に馴染みがあるアーティストではないので、1960年代当時どのくらい人気があったのか、また社会的に影響があったのかを理解してもらうために1980年に行われたニューヨークでの53万人フリーコンサートの様子などもあわせて紹介する。さらに、映画とは直接関係ないがBridge Over Troubled Waterも取り上げ、彼らと当時のアメリカの情勢、ローザ・パークス事件や公民権運動など、にも内容として触れる。つまり、わずかに2コマながら全体として映画と音楽を通した英語学習と文化や歴史理解の学習になる。このように、スタートは映画の内容理解だが、そこから様々な英語学習活動、また文化的背景の説明を加えることで総合的な英語学習の時間を作り上げることが出来るのである。

## 2-2 二つの作品を比べて内容理解を深める — Romeo & Julietを用いて

Romeo & Julietはシェイクスピアの有名な作品であり、数多く舞台や映画でも上演されてきた。ここでは1960年代に公開されたフランコ・ゼッフォレリ監督、ジュリエットをオリビア・ハッセーが演じたものと、1990年代にバズ・ラーマン監督、レオナルド・デカプリオがロミオを演じた2つの映画を見比べてみる、という実践例を紹介する<sup>2)</sup>。内容理解のポイントは2つを比べることでわかることやその違いからどういうことが言えるのか、にある。もちろん、Romeo & Julietという作品をテキスト含めきちんと扱おうと思ったら半期ないし通年分のコマ数が必要になるかもしれないが、ここではあくまで同じタイトルの2つの映画を見比べ、その違いについて書く、話すといったアウトプットへとつなげるための話題提供的な役割を担わせており、専門教育的なアプローチの授業とは当然異なる。

まず事前説明としては先のThe Graduate同様、全体を通してのストーリーは事前に紹介しておく。その上で、まずはストーリーの主要な場面をかつまんでフランコ・ゼッフォレリ監督版を用いて見もらう。こちらも全て見るとなると約2時間半と結構な時間がかかるので、45分程度で収まるよう予め見せる場面は決めておく。その後で今度はバズ・ラーマン監督版のものもほぼ同じシーンだけ見てもら

1) 服部良輔 (1988) は逆にリスニングとして用いた例を「映画「卒業」を使った授業—Listeningを中心として—」と題し発表している。

2) いくつかの映画Romeo & Julietを比較した研究は他にも存在する。例えば、小林康男 (2010) の「「ロミオとジュリエット」映画化された3作品の比較」など。

う. 具体的場面として主に以下の5つを挙げる.

Scene 1 Encountering Romeo & Juliet

Scene 2 Balcony

Scene 3 Romeo kills Tybolt

Scene 4 Medicine for Juliet

Scene 5 Death for Romeo & Juliet

これら5つのシーンはストーリー展開として必須な場面であり, かつ違いが現れるシーンでもある. たとえばScene 4でのジュリエットが飲む睡眠薬だが, ゼッフォレリ版では42時間なのに対し, バズ・ラーマン版では24時間となっている. それがScene 5の最後の場面でのロミオとジュリエットの行動にも関係してくる. このように, 2つの版を見て違いを受講者たちに検討してもらった後, この比較の解説的ビデオを見てもらう. これは執筆者が個人的に縁のあるバレット・フィッシャー氏, ミネソタ州にあるベセル大学にてシェイクスピアと映画を教えていた教授, に語ってもらったもので, 執筆者がハンディカムにて撮影した, オリジナルビデオである. 受講者たちはこのビデオ(約10分間)を見ながら, 専用ワークシートにキーワードを記入する形でリスニングと内容理解を行う. この活動も先の*The Graduate*同様, 映画そのものは内容理解として扱い, 音声の理解には特に触れないので, それを補う意味でも別途リスニング用のものという位置づけで用意し, 扱った. なお, 執筆者はほぼこれと同じ活動を高校3年生対象に行ったことがある. 当時の授業報告は既出なのでここでは扱わないが, *Romeo & Juliet*は傑作か否かをめぐるライティングや, ダイアログを会話形式で練習するスピーキング活動などを報告してある.

### 2-3 字幕を上手に切り換えて — *Freaky Friday*と『ルパン三世 カリオストロの城』を用いて

このセクションでは, DVDの字幕切り替えを用いた実践例を紹介したい. もはやVHSなどのビデオテープを探す方が難しい今日だが, DVDにある字幕切り替えをうまく使うことで同じ場面での言語の違いを示すことが容易になった. 幡山秀明も映画を英語の授業で用いるにあたって, 「特にDVDの字幕選択機能(英語・日本語・字幕なし)を効果的に使用することが, 言語習得と内容理解に大いに役立つはずだ。」(幡山, 493)と述べている. そうした実践例をまずは*Freaky Friday*を題材にした場合で紹介したい. 先の二つの例は共に映画そのものの音声进行学习対象とはしなかったが, この活動は映画内での音声に着目する. *Freaky Friday*は母と娘がひよんなことから心はそのままに, しかし身体だけ入れ替わってしまうというファミリーコメディである. 執筆者はこの映画を2003年にアメリカの映画館で字幕なしの状態で見ただけだが, それでも内容的に理解ができ, 大変おもしろく感じたのでこれをうまく英語学習の教材として使えないだろうかと思いついた. そこで考えついたのが, DVDの字幕機能を利用し, 英語の字幕で英語音声, 英語の字幕で日本語音声, 日本語字幕で英語音声, という三段階での視聴方法である. こうすることで同じ場面でも表現や言い方が異なり, 言葉の多様性を英語, 日本語共に学ぶことが出来る. この方法のよいところは3回異なったアプローチをかけるので, 内容がわからないという受講者はいなくなる点にある. しかし, 3回見るとなるとすでに理解してしまっている受講者にとっては, いくら言語の違いを学べると言っても若干繰り返しが多いという印象を持たれてしまうので, そこは判断が難しく, その主旨説明を最初にしっかりしておかなければならない. 当然, このアプローチは

それ相当の時間がかかるので、映画を最初から最後まで活用するとなると半期15回分の授業時間が必要になる。また、上記の方法で映画を見るだけではリスニングにおける音声理解の向上や言葉の違いへの気づきはあったとしても、ほかの技能を扱う時間が十分に確保できないので向上が見込めず、英語の授業としてはアンバランスになりかねない。そこで、*Freaky Friday*の原作をペーパーバックで多読的に読んでもらうリーディングの時間も同じ授業内活動として設けた。多読的に、というのは実際に読むのは授業時間外で、受講者は授業開始前までに該当する箇所、ページ数指定やチャプター毎などで区切ったところまで、を読み、その内容を英語で要約すると同時に内容に関する3つの設問を考えてくることがタスクとなる。授業内では要約をペアになって紹介し、その後お互いに用意してきた設問にその場で答えることを活動内容にした。こうすることで、リスニング以外の技能もカバーした。

なお、原作は映画とはかなり異なるので、最初のうちは映画で見ている場面を文字で追えたのだが、だんだん内容的に乖離しだし、時には映画での内容とリーディングでの内容が全く異なるという現象も起きてしまったが、先の*Romeo & Juliet*のように同じ題名のものを比べてみるというコンセプトにおいては、違いがはっきりしていて逆によかったのかもしれない。ちなみに、この活動を行ったクラスは再履修系のクラスでかつ英語をある特定のスキルだけでなく総合的に網羅するという主旨の授業だったので、おもしろい映画を用いて楽しく英語に触れてほしいというのと、英語のレベルが受講者数(約50名)の中で一定していなかったがゆえに幅広く出来るものを、という意味からこの方法を用いることにしたという背景もあった。

こうした、音声を用いて英語、日本語の違いを明確に示す方法をわずか1コマ90分以内の授業時間で導入的に行うとしたらどのようにしたらよいだろうか。その際に有用な作品が『ルパン3世 カリオストロの城』である。これは宮崎駿監督が最初に監督した作品としても名高いアニメ映画だが、こちらもDVDに含まれている英語音声が使える。つまり、日本のアニメを英語で鑑賞することが出来る。この作品は宮崎アニメの一部ということもあり、かなり有名なのですでに日本語で見たことのある受講者も多い。よって作品全ては当然用いず、最後のシーンのみ英語字幕英語音声と英語字幕日本語音声で見もらう。するとその表現にかなり違いがあることがわかる。日本語音声ではほんの一言二言の会話、あるいは沈黙の場面において、英語ではかなり状況や気持ちを言葉としてはっきり述べている。例えばI love youという表現は英語では繰り返し用いられるが、日本語ではそれに該当する表現は皆無である。どちらが正しいか、あるいは好きかは個々の好みに分かれるのでそれはあまり議論の対象とせず、むしろ違いが明瞭であることに着目させたい。そしてその後、自分の好きな日本のアニメや漫画を英語でライティング、あるいはプレゼンテーションといった活動へとつなげていくとよいだろう。なお、幸いなことに同じ宮崎駿監督のジブリ作品では英語字幕、英語音声が含まれているものが多いので、興味があれば受講者自身で同じような方法で映画を見て英語表現が学べることを伝え、自主的な学習を促して学習への動機づけを高めることもできる。

### 3 映画と英語教育のさらなる可能性について

ここまで執筆者のオリジナルな実践例を紹介してきた。最後に、映画と英語教育のさらなる可能性を議論するために、そうした示唆に富む実践例をひとつ紹介しながら考えていきたい。この実践例は高知



大学にて柳瀬真紀が「大学英語入門」という授業の中で行ったものである。扱った作品はマイケル・ムーア監督の『世界侵略のススメ』で、欧州を中心に11か国の雇用制度や社会保障などを追ったドキュメンタリー作品である。柳瀬はこの映画を国ごとに区切って見せ、全編見終わった後にグループ（1グループ6人）で映画を基に自主的にトピックを決め、リサーチなどを経て最終的には15分間のグループプレゼンテーションを行うというタスクを与えた。映画そのものを音声理解として扱うわけではない点は先の執筆者のオリジナル実践例と共通するが、映画に関するトピックでのグループプレゼンテーションというやり方は柳瀬独自のものである。この授業の受講者は48名で、全員が1グループ6人の8チームに分けられた。活動のポイントは6人が協力してリサーチやパワーポイント作成を行い、かつ6人全員がプレゼンターとして発表しなければならないので、否が応でもグループ内に協力体制が生まれるところにある。その過程において英語学習が主体的になされ、結果として受講者個々の中に英語学習に対する肯定的な気持ちが芽生え、自律学習者への素養が培われたと柳瀬は言う<sup>3)</sup>。

これまでの映画を用いた実践例は大学英語教科書にもそれが現れているように、音声理解が中心であった。確かに映画を英語で視聴する以上は英語学習としてそうした音声理解に着目するのは至極当然ではある。しかし、音声理解が出来なければ使う価値はない、学習出来ることはない、とは言えない。事実、執筆者や柳瀬が行った活動例は映画の位置づけとしては内容理解を中心に、英語学習としてはアウトプットへとつなげることを意識して行っている。こうしたポイントはまだまだ発展の可能性があり、例えば日本映画を英語（ライティングやプレゼンテーション）で紹介するといった活動も考えられるだろう。

## おわりに

本稿では、映画と英語教育との関連性をめぐって実践例を中心に考察してきた。まず、先行研究とこれまでの大学英語教科書では映画英語教育についての角山の研究などを紹介し、大学英語教科書の誌面構成から考える映画を使った英語の授業の流れを確認した。教科書の誌面から察するに映画を英語の授業で用いた場合、音声理解がその中心でその後内容理解が来る、というのがスタンダードなパターンであったことがわかる。つぎに、オリジナル実践例では執筆者が行ってきた実践を3つ、紹介した。*The Graduate*を用いた実践では内容理解とライティング、関連するサイモン&ガーファンクルのリスニングも含め総合的な学習時間を演出する例を示した。*Romeo & Juliet*を用いた場合は同じくストーリーの理解に始まり、2つのバージョンを比較検討し、関連するビデオを用いてのリスニングと内容理解を促す活動を行った。*Freaky Friday*と『ルパン3世 カリオストロの城』ではDVDの字幕切り替えを用いて映画で使われている英語表現の理解を試みる例を紹介した。個々によって配当する授業時間は異なるが、*Freaky Friday*を除いた他の例はどれも1、2コマで実践可能な例である。最後に、映画と英語教育のさらなる可能性として柳瀬が行った内容理解からグループプレゼンテーションへといった総合的英語学習の例を紹介した。

これまで検討してきたように、映画は英語学習において身近で、かつ様々な題材のものがあり、教員

---

3) 具体的授業方法に関しては2017年7月に行った柳瀬へのインタビューによる。

と受講者の興味が合致すれば学習動機を強く引きだすよい教材となりうるだろう。しかし、「見る」という行為は視聴者側が興味を失った途端、ただの受け身的な行為にすぎなくなってしまうので、教員は受講者の興味をよく吟味して映画を選ぶと同時に、見た後で何をするのか、どのような活動をさせれば効果的なのかをよく考えておく必要がある。むしろ、そうした活動を前もって十分に準備し、効果的に提示していくことで「見る」という行為が能動的になっていく可能性すらあるだろう。本稿ではどちらかという内容理解を起点にした、英語学習における映画の扱い方を示した。こうした実践例が今後さらに多く行われ、より楽しい英語学習が発展していく一助になれば幸いである。

## 参考文献

- 角山照彦. 2008. 『映画を教材とした英語教育に関する研究』岡山：ふくろう出版
- 関戸冬彦. 2004. 「英語教育実践報告：『ロミオとジュリエット』を使った高3ライティング授業」明治学院大学大学院英文学専攻『ねびゅらす』第32号, 73-84.
- 幡山秀明. 2006. 「英語教育と文学的教材[2]」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第29号, 493-497.
- 柳瀬真紀. 2017. 「英語教育実践報告—いの町菊池学園取り組みを参考に—」『高知大学教育研究論集』第22巻, 37-45.



関戸 冬彦 (Sekido Fuyuhiko)

所属：獨協大学国際教養学部言語文化学科特任准教授

専門：英語教育, アメリカ文学

Email：fuyuhiko@dokkyo.ac.jp